

目次

はしがき……………松尾 聰……………一

研究篇

紫式部新考……………岡 一男……………七

紫式部日記の変貌……………南波 浩……………壹

紫式部の自然描写の特質……………阿部 俊子……………七

既存の物語への姿勢……………今井 卓爾……………二九

——源氏物語を中心に——

源氏物語と蜻蛉日記……………上村 悦子……………一五

蜻蛉日記における作者の心的背景……………宮崎 莊平……………二〇

——道綱母と時姫およびその子女たち——

和泉式部日記形成論……………木村 正中……………三〇

資料篇

専修大学図書館蔵

伝藤原家隆筆源氏物語系図……………中田 武司……………三五

禁九流日記附録の甘言……………中田 武司……………三六

禁九流日記の交遊……………中田 武司……………三七

禁九流附録……………中田 武司……………三八

参考文献

和泉式部日記

目次

研究篇

まず、紫式部の祖父従三位中納言兼右衛門督藤原兼輔の父は、従四位下右中将利基で、『古今和歌集』卷十六の「哀傷」の部の次のごときエピソードによって想像することができ。

藤原利基の朝臣の右中将にて棲み侍りける曹司の、身まかりて後、人も棲まずなりにけるに、秋の夜ふけてもよりまうで来けるついでに見入れければ、もとありし前裁もいと繁く荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりて詠みける

御春有輔

君が植ゑしひとむら薄虫の音のしげき野辺ともなりにける哉

御春有輔というのは藤原敏行の家人で、敏行の没後、和歌をもつて利基の知遇をえ、その直盧の曹司に伺候したことが、しばしばあったのであろう。故人を追悼する情が切々と抒せられていきよらかな歌だが、利基の風雅な人となりも、この歌から忍ばせるものがある。

この利基の六男が兼輔だが、彼は宇多・醍醐・朱雀の三朝に歴仕し、承平三年（九三三）に五十七歳で薨じた。賀茂川の堤のところにその邸宅があったので、世に堤中納言と称せられた。醍醐天皇の『古今和歌集』撰進の勅命を紀貫之らに伝宣した延喜歌壇の一惑星で、歌は『古今和歌集』以下十一代の勅撰集に五十余首入り、藤原公任の三十六歌仙の一人にも選ばれている。『聖徳太子伝略』二巻のほか、家集一卷が残っているが、その中に、彼の父性愛を伝えるものとして、

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

とあるのは、彼が醍醐天皇の後宮に更衣として入内させたむすめの桑子を案じて詠んだもので、紫式部もしばしば源氏物語に引歌として用いており、親心を道破した千古の絶唱として今に喧伝している。また同じく家集に、彼の交遊の有様を